

Car Entertainment Magazine

GENROCK

[ゲンロク]

2023
JAN
No.443

1

定価 1100Yen

Porsche

2023

ポルシェ最強伝説

[NA6気筒兄弟の闘い] 911GT3 vs 718ケイマンGT4 RS

[サーキット最速の秘密] 911GT3 RSのサスペンションに迫る

[タイプ992総括] 911GT3 / 911カレラ4GTS / 911カレラ・カブリオレ

[電動化への道] ポルシェ最新BEV現地取材



スーパースポーツ最新事情

フェラーリ・プロサングエ日本上陸 / フェラーリ296GTS初試乗
マクラーレン・アルトゥーラ in 富士スピードウェイ

特選ショップ全国版

Built to inspire

Innovative design and high standard defines HYPERFORGED WHEELS.
Nothing is compromised in the making of these highquality wheels and it shows.
Travel in style with HYPERFORGED.

Made in Japan



LMC
Disc finish: Brushed Anodized Light Bronze Rim outer finish: Anodized Light Bronze/Gloss Rim inner finish: Anodized Black/Matte
12 Point Stainless Bolt Classical ContiSportContact6 F:255/30-21 R:335/25-22 Ferrari488Pista Spider
Special thanks :  www.ap-dank.com

HF-LMC



ハイパーフォージドはスーパースポーツからハイエンドSUVまで、車種カテゴリーを問わず親しまれてきた。特に2019年末に登場したLMCは、10本のY字スポークで構成されるハイパーフォージド流のメッシュデザインが支持され、いまや不動の人気を誇る。アヴェンタドールからGクラスにまで似合うのだから驚く。そんなホイール、巷を見渡してもそうあるものではない。

そんなLMCを上品に履きこなす、メルセデスAMG GLS 63に出会った。ハイエンドカーを中心に車両販売からカスタムまでを担うCSFが仕上げた1台である。GLS 63となれば高級サルーンのように上質かつ快適で、イザとなればスポーツカーを蹴散らすように速い。それでいてSUVという風体を持つオールラウンダーである。性能にしても世界観にしても、ふさわしいホイールは限られてくる。やみくもなカスタムは、逆にGLS 63の魅力を損じてしまうことになりかねない。

しかし、LMCなら何も心配は要らない。何よりもそのサイズ感がいい。GLS 63の純正は22インチ、オプションで23インチのAMGマルチスポーク



センター付近で二手に分かれ、さらに途中で分岐してリムへと到達するメッシュデザインを持つ。リム裏側にはピアスポルトが存在し、マルチピースホイールであることを訴える。

が用意される。そこで今回はさらに1インチアップした24インチを持ち込んだ。LMCの基本ラインナップは19～22インチだが、その範疇を飛び越えた24インチモデルが別に存在する。今回はフロント10.5J、リヤ12.0Jの24インチを投入した。この極太サイズに対して、タイヤはそれぞれ295/35R24、335/30R24というもの。このサイズは日本に流通する銘柄を見渡しても皆無だったそうで、結果、欧州向けのコンチネンタル・スポーツコンタクト6を組み合わせた。

ロワリングキットによってわずかに落とした車高に対して、このコーディネイトは抜群に似合っている。ホイールは大径ながら、ピアスポルトを含めてホイール全体を黒く落とし込んだことで、ダイヤモンドホワイトのボディを絶妙に引き立てている。単なる黒色ではなく、ディスクはブラッシュド・ブラック・アナダイズド、リムはブラック・アナダイズドという仕上げが施されて、鍛造削り出しならではの質感を強調する。各スポーク部分は丁寧なマシニング加工が施され、角度を変えるたびに、あるいは光の当たり加減によって幾多もの表情をみせる。初見での印象はとて繊細でエレガント。じっくりと眺めると、鍛造削り出しを訴えるハイパーフォージドっぽい、いつものたくましい雰囲気も顔を覗かせる。今回、奥に潜むAMGレッドキャリアーが差し色として浮き立ってくるのも絶妙だと思える。

このGLS 63に象徴されるように、ディスクや

リムの仕上げに数多くの選択肢が用意されるのがハイパーフォージドの強みだ。サイズに関してもオーダーメイドが可能で、数多くの車種ばかりか、攻めたカスタムカーまでを許容する。こうした選べる体制が、唯一無二を求めるハイエンドカーユーザーから支持されてきた理由である。

いや、いかにオーダーメイドが可能であっても、デザインや品質が二の次であってはならない。支持されてきた最大の理由は、圧倒的に美しい造形であり、そしてGLSで言えば612PSという出力性能と、2680kgもの車両重量を難なく受け止める強度や剛性、そして信頼耐久性が宿ることである。

高品質な6061-T6アルミニウム合金の鍛造ビレットに、それをホイールへと昇華させる優れた切削加工技術、さらに前述したような表情へと導く仕上げ術。メイド・イン・ジャパンで紡ぎ出される最高峰の鍛造ホイールである。

過度なドレスアップではないし、かといって没個性というわけでもない。優美さと力強さが同居するAMG GLS 63に対して、絶妙な塩梅で花を添えていて、その性能と世界観を引き立てている。AMG GLS 63というオールラウンダーに対してホイールを違えるだけで、粋な遊び心が加わったことにはあらためて驚かされた。

オールラウンダーの遊び心

HYPER FORGED
LMC ×
Mercedes-AMG
GLS 63 "CSF"

誰にでも乗りやすく、疲れ知らずで極上の車室空間を持ち、いざ踏めばスポーツカーを蹴散らす速さを涼しげに披露する。完膚なき性能を持つAMG GLS 63にこそ、些細な遊び心を。その性能と世界観を受け止めるハイパーフォージドが調和する。

REPORT ● 中三川大地 (NAKAMIGAWA Daichi) PHOTO ● 真壁敦史 (MAKABE Atsushi)



フロント10.5J、リヤ12.5Jの24インチがGLS 63の巨体にすっぽりと収まる。タイヤはそれぞれ295/35R24、335/30R24サイズのコンチネンタル・スポーツコンタクト6だ。



24インチの場合、P.C.Dは5-112～150まで対応する。どのサイズもボルトホール間をスポークが通り、スタイリングを犠牲にしない。

←各スポークは切削加工によって鋭利に折れ曲がるような造形を持つ。そこにアルマイト仕上げ(ブラッシュド・ブラック・アナダイズド)が加わることで独特の質感を放っている。



グラファイトブラックガラスフレークのボディに対して、さらにメッキパーツを中心に黒く落とし込んだ。モール類やグリルは純正のままだが、レクサスエンブレムはカラープロテクションフィルムによってトーンダウンする。こうした小技もECスペックらしさだ。



生まれ変わったレクサスLX600やランドクルーザー 300が魅力的なモデルであることに間違いはないだろう。しかし、今や数年単位という納期の壁が立ち塞がる。頻繁に街中で見かけるようになり、カスタムが盛り上がるようになるまでは、まだ時間がかかりそうだ。そうした中で、福岡に本拠を構える気鋭のチューナーであるECスペックが、早速、LX600を仕上げた。

実際、九州エリアでも最速のタイミングで納車された個体だったという。つまりは手を加えるにあたってデータがなく、すべてが手探りの状態だった。そうした時、ECスペックの井口拓也氏が持つセンスと技術が頼りになる。もうひとつはハイパーフォードだ。オーダーメイド体制を持って、あらゆるサイズや仕様を作ってくれる。

ホイールはハイエンドSUVはおろかスーパー

ペイント・イット! ブラック

EC.SPEC LEXUS LX600

福岡に本拠を構える気鋭のプロショップ「ECスペック」から、早速、登場間もないレクサスLX600のカスタムカーが登場した。全身くまなくブラックアウトされて、異様なオーラを漂わす。単に黒く落とし込んだだけではなく、そこには抜群のセンスが宿る。

REPORT ● 中三川大地 (NAKAMIGAWA Daichi) PHOTO ● 白谷 賢 (SHIRATANI Ken)



足もとにはハイパーフォード [LMC] の24インチを装着する。ボディと同系統のグロスブラック系の色味として、そこに前後305/35ZR24というファットなタイヤを組み合わせた。華やかなメッシュパターンながら、どこかスポーティなテイストも感じられる。

スポーツ界限でも定番となったLMCの10.5J×24インチを。ボディと同じ色味として黒基調を選んだ。そのうえで305/35ZR24サイズのビレリ・スコーピオンZEROを組み合わせる。今までLX570界限では295付近の幅を使うのが一般的だったが、今回はそれよりわずかに太くした格好だ。過去、ECスペックが手がけたLX570での装着実績を、こうしてLX600にも活かしたのだ。

ボディカラーはレクサスお得意のグラファイトブラックガラスフレーク。これはメタリックが強く、塗装面はまるでラメのようなキラキラ感が強調される。さらに7組のフローティングバーからなる巨大なスピンドルグリルが備わって、黒基調と

いっても華やかな雰囲気満点である。それをあえて黒く落とし込む方向で舵を切ったのが今回のアプローチだと言える。ボディ側のメッキパーツと、そしてモデリスタのエアロパーツ類はソリッドブラックで落とし込んだ。同じくモデリスタのサイドステップはラッピングによって、フロントに掲げられるレクサスエンブレムはカラープロテクションフィルムを使ってトーンダウンするほど、ディテールにかけるこだわりがある。

とはいえ、やみくもに黒くし過ぎたり、質感を違えればいいというものでもないようだ。先に述べたスピンドルグリルのほか、ルーフレールや窓枠などは純正のまま手を加えず、ごく自然な雰

気としているのがいい。黒塗りだけれども黒すぎずという絶妙な塩梅のコーディネートである。

今のところ、ストリートではその存在自体が珍しいのがLX600である。ましてこんな独創的なコーディネートを纏っていたら、誰もが振り向くスーパーカー級のオーラを放つに違いない。しかも、きらめくネオンがボディに溶け込む夜こそ似合いそうだ。健康的なアウトドアツールはランクル300に任せておいて、LX600は堂々とコワモテを演じていたい。このコーディネートにはそんな潔さがある。やがて、LX600の異常なほどの納期待ちが解消される頃になっても、このLX600は孤高の存在感を放ち続けると思う。

